

窓 スイス

華やかで楽しい歌が流れ出た時に
哀しく取り残された貧しさが涙をこらえる

希望は消えない——考える暇^{いとま}もない故に
まばゆい雪の反射の中に見えているのだろう

ひっそりと景色に紡がれてゆく小さな心は
次第に1枚の衣装へと織り上げられてゆく

徒に過ぎて行くような気もしないわけではない
けれどこの時を破ろうとする手はやはり止まる

ふと窓の外に見つけて指差す鹿に目を奪われる
それが通り過ぎた後に舞踏への招待がささやかれ
赤く燃える頬に、白く輝く谷が「ようこそ」と言う

(1984.4.1)